第四章　光る源氏の物語　信仰生活と神の啓示の物語

［第一段　須磨で新年を迎える］

須磨には(須磨にあっては)、年返りて(年が改まって)、日長くつれづれなるに(日長に時を過ごす内に)、植ゑし若木の*桜ほのかに咲き初めて(昨年三月末の来所早々に庭の整備の際に植えた若木の桜がちらほら咲き出して)、空のけしきうららかなるに(長閑に晴れた日和に)、よろづのこと思し出でられて(京での暮らしを思い出しなさって)、うち泣きたまふ折多かり(涙ぐまれることがよく在りました)。　*注に＜須磨で新年を迎える。源氏、二十七歳。二月中旬頃であろうか。＞とある。今の太陽暦だと旧正月は 2 月 10 日前後が多いので、ざっと 1 ヶ月遅れの三月中旬と考えれば桜も咲く。思うに、電気以前の生活感に月の満ち欠けは圧倒的な説得力を持っていたのだろう。其の形の見え方も其の反射光の具合も日付の認識に用いられて当然だ。ただ、出入り時刻は地球の自転事情に拠るとしても、朔望の大半は月の公転周期の事情で朔望の 12 回セットは地球の公転周期の 1 年にかなり近いが少し足りない。ところが気候は我が恒星たる太陽に絶対支配されている。そこで先人は其のズレの調整を、先ず年間の気候特性を二十四節気で分類した上で、朔望周期との折り合いを閏月を設けて工夫した。必要に迫られての事だろうが、大した知恵だ。世界水準の便法としてグレゴリオ暦に代わるものは無いのかもしれないが、陰暦から陽暦への変更に郷愁では片付かない喪失感を現代人は覚えざるを得ない、気がする。また、面白いのは曜日の説得力で、水･金･(地)･火･木･土の惑星に大将(恒星)の日と子分(衛星)の月の七曜で一週間とする、というのは、月影や日陰の見た目からすると可也理屈っぽい概念に思えるが、寸也支持されているように見える。因みに、彼の藤原道長の「御堂関白記」なる日記に既に七曜が記されていたという。今日のように日曜を休日とするといった実用法ではないにしても、何がしかの説得力は認められていたのだろう。そして不思議なのは曜日の基点の決定である。現在の国際基準の裏付けも慣習以上の説明は無いらしい。七曜は本当に納得出来ている生理なのだろうか。

二月(きさらぎの)二十日あまり(はつかあまり、末頃)、去にし(いにし)年、京を別れし時、心苦しかりし(別れを惜しんだ)人びとの御ありさまなど、いと恋しく、「南殿の桜、盛りになりぬらむ。*一年の(ひととせの、さる年の)花の宴に、院の御けしき、内裏の主上の(うちのうへの、今上帝が)いときよらになまめいて(とても美しく優雅に)、わが作れる句を誦じたまひし」も、思ひ出できこえたまふ。　*注に＜源氏、二十歳の春、「二月の二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ」(花宴）とあった。ちょうど同じ時期。＞とある。

「いつとなく大宮人の恋しきに、桜かざしし今日も来にけり」(和歌 12-42)

「いやに恋しい桜だと、南殿の宴を懐かしむ」(意訳 12-42)

*何とも気の抜けた噛み応えの無い歌に感じて、何処か腑に落ちない。改めて注を見ると＜源氏の独詠歌。都を恋うる歌。「ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮しつ」(和漢朗詠集、春興、赤人）を踏まえる。＞とあった。「ももしきの」は＜多士済々が集う＞くらいの意味で賑やかな華やぎを演出して「大宮人(おほみやびと、御所または宮廷人)」に掛かる枕詞、との事。「大宮人は暇有れや」は＜御所勤めの連中は休みを貰ったのだろうか＞で、「桜髪挿して今日も暮らしつ」は＜祭りに浮かれて今の日も遊んでいる＞という所か。いや然し、この引歌も腑に落ちない。休みに遊んでいる事を詠んで、何が面白いのか分からない。で、改めて「暇」を古語辞典で調べたら＜仕事

の無いヒマ＞の意味の参照に、「ももしきの(百識の)おほみやびとはけふもかも(大宮人は今日もかも)いとまをなみと(暇を無みと)さとにいでずあらむ(里に出でず有らん)」(万葉集 1026)、という歌が紹介されていた。ん、何か引っ掛かるな。「大宮人は今日もかも」は＜御所のヤツラは今日もまた＞で、「暇を無みと里に出でず有らん」は＜忙しいと言って野良仕事に出て来ない＞という事だろうか。だとすると引歌からは、「大宮人」は「暇有れ」ば御所の宴に遊び「暇無み」と言っては土仕事をしない、という「暇」という言葉に皮肉を利かせた可笑しさが感じられる。しかし何せ参照歌を見ただけの思い付きなので、是だけでは今ひとつ両者を結びつけるには強引過ぎる。ものかとも思って引歌を Web 検索して、何か其れらしい手掛かりが無いかと探していたら、「ももしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここに集へる」(万葉集 1883)、が引歌の底歌とされていることが分かった。コレ、アタリでしょ。「梅をかざしてここに集へる」を「桜かざして今日も暮しつ」に変える意味は、単に「梅」より「桜」のほうがバカっぽいからだけじゃないでしょ。参照歌の「今日もかも」を意識しての「今日も暮しつ」に違いないでしょ。そういえば先に、須磨暮らしで初めて「下人の上をも見たまひ、慣らはぬ御心地にめざましう、かたじけなう身づから思さる(下働きの暮らしぶりを実際に目にして、その予想外の厳しさに驚き、恵まれた境遇を自覚なさる)」という記述も在った。いや、そこでだ、改めて源氏の歌を見直すと、この風刺っぽい引歌を踏まえているなら、随分とニヒルな印象になってくる。そう思って我が意訳を見ると、いや是でも結構斜っぽい。

いとつれづれなるに(源氏はまるで単調な暮らしぶりだったが)、大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世の(ときよの、政務を)おぼえ重くて(信頼されて)ものしたまへど(任されて居らしたが)、世の中あはれにあぢきなく(世情が味気なく)、ものの折ごとに恋しくおぼえたまへば(折に触れて源氏を恋しく御思いに為って)、「ことの聞こえありて(大后に知られて)罪に当たるともいかがはせむ(罪に問われても構わない)」と思しなして(と決心なさって)、にはかに参うでたまふ(急に源氏に会いに須磨へ御出でに為りました)。うち見るより(会った途端に)、めづらしううれしきにも(久々の再会に嬉しくなって)、ひとつ涙ぞこぼれける(二人共に涙をこぼしたのです)。

住まひたまへるさま(源氏が住まう家は)、言はむかたなく唐めいたり(見るからに異国めいて洒落ていました)。所のさま、絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階(はし)、松の柱、おろそかなるものから(簡素ながら)、めづらかにをかし(珍しく趣が在ります)。

山賤めきて(また源氏の格好も山暮らしらしく)、ゆるし色の(薄紅色の)黄がちなるに(黄味がかった内着に)、青鈍の(あをにびの、青ねずの)狩衣、指貫、うちやつれて(着崩して)、ことさらに田舎びもてなしたまへるしも(如何にも田舎風になさって御出でなのも)、いみじう(飾り気が無く)、見るに笑まれてきよらなり(微笑ましい清々しさでした)。

取り使ひたまへる調度も(お使いに為っている日用品も)、かりそめにしなして(一時凌ぎの質素なもので)、御座所もあらはに見入れらる(居間には仕切りもありません)。碁、双六盤(すごろくばん)、調度(こま)、弾棊(たぎ、おはじき)の具など(の道具なども)、田舎わざにしなして(素朴な作りで)、念誦の具(ねんずのぐ、読経の数珠などが)、行なひ勤めたまひけり(今しがた修行を終えたばかり)と見えたり(のように見えていました)。もの参れるなど(出された菓子類などは)、ことさら所につけ(さすがに地方ならではの)、興ありてしなしたり(珍しい物でした)。

海人ども(あまども、漁民たちが)漁り(あさり、漁を)して、貝つ物(かひつもの、貝類を)持て

参れるを、召し出でて御覧ず(源氏は近くへ呼び出して御会いなさいます)。浦に年経るさまなど問はせたまふに(漁村の暮らしぶりを従者から問いかけさせなさいますと)、さまざま安げなき身の愁へを申す(様々な心配事を申します)。そこはかとなくさへづるも(ぶつぶつ喋りたてる漁民の様子を見て)、「心の行方は同じこと(憂う気持ちに変わりは無い)。何か異なる(立場は違っても)」と、あはれに見たまふ(同情なさいます)。御衣どもなど(衣類などを)*かづけさせたまふを(お与えなさいますと)、生けるかひありと思へり(漁民等は生きてきた甲斐があったと喜びました)。　*注に＜「かづく」「かひ」など海人に関係ある語句を選んで表現。「させ」使役の助動詞。＞とある。「潜く(かづく)」は＜頭を垂れて冠を頂く＝被く(かづく)＞と連用で＜水中に潜る＞という意味になる、との事。また「被く」には＜負担を負う＞や＜だまされる＞の被る、という意味もある。

御馬ども(おんむまども、数頭の馬を)近う立てて(近くに繋いで)、見やりなる(其の先に見える)倉か何ぞなる(倉か何かから)稲取り出でて飼ふなど(稲を取り出して食べさせたりするのを)、めづらしう見たまふ(宰相は物珍しげに御覧に為って、催馬楽の)。「*飛鳥井」すこし歌ひて(を少し御歌い為さり)、　*注に＜「あすかゐに　やどりはすべしや　おけ　かげもよし　みもひもさむし　みまぐさもよし」(催馬楽) という歌詞。＞とある。「飛鳥井に宿りはすべしや(飛鳥井で休むに限るよね)おけ(そりゃそうだ)蔭も好し(日陰は在るし)御盛水も寒し(水は冷たいし)御秣も良し(馬の餌も在る)」という事らしい。

月ごろの御物語(近頃の京の様子の御話しに)、泣きみ笑ひみ(泣き笑いして)、「若君の何とも世を思さで(若君がまだ事情がお分かりにならずに)ものしたまふ悲しさを(御出でに為る悲しさを)、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く(親父殿は始終嘆いていらっしゃる)」など語りたまふに(などと宰相が御話しになると)、堪へがたく思したり(源氏も堪らない思いになりました)。

尽きすべくもあらねば(御二人の積もる話は尽きそうもないので)、なかなか片端もえまねばず(筆者は其の一端すら十分にお伝えできません)。夜もすがらまどろまず(御二人は夜通し一睡もなさらず)、文作り明かしたまふ(漢詩文を作って夜明かしなさいます)。

さ言ひながらも(その様にして世を憚らず旧交を暖めるとは言いながらも)、ものの聞こえをつつみて(事を荒立てたくも無いので穏便を旨に宰相は)、急ぎ帰りたまふ(早々に御帰りに成ります)。いとなかなかなり(実に名残惜しい)。御土器(おんかはらけ、別れの杯を)参りて(交わして)、「*酔ひの悲しび涙そそく春の盃の裏」と(と白居易の漢詩句を)、諸声に(もろごえに、声を合わせて)誦じ給ふ(ずじたまふ、お歌いなさいます)。　*注に＜『白氏文集』律詩の「酔悲灑涙春盃裏　吟苦支頤暁燭前」の詩句。＞とある。「酔悲灑涙春盃裏」は＜悲しい春の別れの杯を空けて＞だろうか。「吟苦(吟苦して)支頤(頤ｵﾄｶﾞｲを支ふ)暁燭前」(暁燭の前)」は＜頬杖を付いて詩作に悩む夜明け前＞だろうか。この漢詩全文は「根本智治氏の Web ページ」に紹介されていたが、丹念に読み下す力は私には無い。雑感した所は左遷された友を見送る詩らしく、宰相が源氏の閑所を去るこの場面の演出にピッタリはまる、というか作者がこの場面の下敷きにした情感、という事のようだ。詩句は「未だ死せずんば會ず應に相見ること在るべし(生きていれば何れ其の内に逢えるだろう)又知らんや何れの地復た何れの年なるを(何時何処でとは言え無いが)」で結ばれている。こうした離別の情感を表した詩文を引用したこの場面を根本氏は象徴的に捉えて、須磨巻の主題を＜死から救済へ＞と指摘しているようだ。その点については素人なので良く分からないが、為時女が漢文に造詣が深く、父親譲りの高い見識を自慢したいが、女ゆえに控えめを装って漢詩を織り込んで話を構成した、という一般的な指摘は窺える気はする。

御供の人も涙を流す。おのがじし(従者同士にも)、はつかなる(つかの間の)別れ惜しむべかめり(別れを惜しんだのでしょう)。朝ぼらけの空に(朝が薄っすら明けて来る空に)雁連れて渡る(雁が列を成して北へ帰って行く)。主人の君(あるじのきみ、源氏の歌)、

「故郷をいづれの春か行きて見む、うらやましきは帰る雁がね」(和歌 12-43)

「今は無理でも必ずや、我も帰ると雁を見送る」(意訳 12-43)

*注に＜源氏の宰相中将への贈歌。『菅家後集』「聞旅雁」の「我為遷客汝来賓　共是蕭々旅漂身　欹枕思量帰去日　我知何歳汝明春」を踏まえる。＞とある。冬も近付く九月の大宰府。次第に冷え込む寝付けぬ夜に、越冬に飛来した雁の声が聞こえた。冬鳥の声とは通りで寒いはずだ。共に旅寝のさすらう身だが、我は左遷者で汝は避寒者、帰る日を思えば、我は何時とも知れぬが汝は明くる春。という事で、今は春。宰相は雁のように北へ帰ってゆくが、私だって何時かは京に帰ってみせる、という決意表明とも聞こえる歌。

宰相(源氏にこう仰られて宰相は)、さらに立ち出でむ心地せで(さらに立ち去る気に御成りに為れずに、こうお応えなさいます)、

「あかなくに雁の常世を立ち別れ、花の都に道や惑はむ」(和歌 12-44)

「一度彼の世を見た上は、此の世が何処か霞み勝ち」(意訳 12-44)

*注に＜宰相中将返歌。「雁」に「仮」を掛ける。＞とある。「あかなくに」は＜厭きていないのに＝まだ留まりたいのに＞なので「名残惜しいが」。「かり」の「雁」は贈歌の言葉を洒落として受けただけで、意は「仮」。「常世(とこよ)」は＜永遠の世界とか黄泉の国＞ではあるのだろうが、「仮の常世」を＜一時的な恒久＞と言っては余りにも夢想に過ぎるので、＜仮住まいの理想郷＞くらいが閑所を去る場面としては落ち着く。通して「名残惜しくも一旦知った理想郷から帰るとなると華やかさばかりの都では路に迷いそうです」と言い換えてみると、何だか不穏さも覚えるほど意味深な気配。そこで敢えて、夢想する。

さるべき(行き届いた)都の苞(みやこのつと、京土産)など、由あるさまにてあり(宰相が趣向を凝らして携えて来て居られましたので、)。主人の君、かくかたじけなき御送りにとて(其等に感謝を示す御返しにと)、*黒駒たてまつりたまふ(黒駒を御贈りなさいます)。　*注に＜『河海抄』は「よそにありて雲居に見ゆる妹が家に早く到らむ歩め黒駒」(拾遺集恋四、九一〇、人麿)、「我が帰る道の黒駒心あらば君は来ずともおのれ嘶け」(拾遺集恋四、九一一、読人しらず)を引歌として指摘する。＞とある。黒駒つながりで続けて選ばれた二首らしい。歌の表面はどちらも帰途に乗る黒駒に恋心を託しているようだが、「黒駒」の神秘性への思い入れの実感が無いせいか、私には歌の味わいが良く分からない。ただ何れにせよ「黒駒」は、帰途に着く人への気の利いた贈り物ではあるようだ。

「ゆゆしう思されぬべけれど(詰まらない物と御思いかも知れませんが)、*風に当たりては(風に当たると)、嘶えぬ(いばえぬ、いななく)べければなむ(でしょうから)」と申したまふ(と御話しなさいました)。世にありがたげなる御馬のさまなり(滅多に無い名馬でした)。　*「風に当たると嘶くでしょうから」が何故に、然も＜無駄には為りますまい＞みたいな意味の言い回しに成るのかは、私にとっては隠語を使われたように丸で分からない。此処での＜『文選』古詩十九首の「胡馬依北風　越鳥巣南枝」を踏まえ

る。『集成』は「中将の帰路を祝った言葉」と注す。＞という注は、私には必脚である。Web 検索等で調べた。『文選(もんぜん)』は平安時代に『白氏文集』と並んで広く愛読された中国の詩文集、との事。「胡馬依北風(胡馬は北風に依り)越鳥巣南枝(越鳥は南枝に巣す)」という詩句は「行行重行行」で始まる別れを悲しむ八行詩の四行目である。胡は北国で越は南国だから、馬が北風にいななき夏鳥が南側に巣を作るという詩句は望郷の比喩であり、源氏が黒駒の鼻向けにこの詩句を引用して宰相も意味を了解した事は確からしい。しかし二人は別離を悲しむ文言を温め合っただけなのだろうか。確かにそれでも教養人同士の間で交わされた洒落た会話には成っている。ただ「行行重行行」の漢詩は妻が夫の遠征で長期間離れて居る事を切々と嘆いてはいるが、結びは「棄捐勿復道(しかし過去にばかりとらわれずに) 努力加餐飯(元気を出そう)」という決意とまでは言わないが前向きの姿勢を示している。何処か先の『白氏文集』の詩句にも通じる＜再起を図る＞気分が感じられる。源氏と宰相は其の含みで暗黙の了解を交わした、とまで言ってしまうのは穿ち過ぎなのだろうか。

「形見に偲びたまへ(では、これを私と思っていて下さい)」とて(と言って宰相は)、いみじき笛の名ありけるなどばかり(見事な笛の名の付いたものだけを代わりにお渡しになり)、人咎めつべきことは(目立つような多くの品の遣り取りは)、かたみにえしたまはず(お互いに為さいませんでした)。

日やうやうさし上がりて(日が次第に昇って明るくなると)、心あわたたしければ(ゆっくりとはしていられず)、顧みのみしつつ出でたまふを(宰相が何度も振り返りながらお帰りなさるのを)、見送りたまふけしき(お見送りなさる源氏との別れは)、いとなかなかなり(とても印象的でした)。「いつまた対面は(いずれまた)」と申したまふに(と申される宰相に)、主人(あるじ)、

「雲近く飛び交ふ田鶴も空に見よ、我は春日の曇りなき身ぞ　(和歌 12-45)

「雲近く飛ぶ鶴たちも、晴れる日が来ると空に見る　(意訳 12-45)

*この歌の表面はそのまま分かるが、ざっと複意を押さえる。「雲」は雲上人の御座する御所なので、「雲近く飛び交ふ」のは＜帝の取り巻き連中＞なのだろう。「田鶴(たづ)」は歌語との事で、鶴の姿や鳴き声の風情に＜尋ねる＝調べる、訪れる＞の意を掛ける。「空に見よ」は＜空虚に思え＝無駄と知れ＞。「春日(はるひ)の」は＜晴る日の＝必ず疑いが晴れる日を迎える＞。「曇りなき身ぞ」は＜下野に在る者だから＞であり＜無実なのだから＞でもある。通せば、「政府は謀反の詮議など無駄と知れ、私は天に誓って無実だぞ」という主張である。しかし、これは歌なのだろうか。情景詠みの体を成していない。例えば後節が「須磨は春日の曇りなき世ぞ」とかだったら其れらしい気もするが、「我は」では「空に」「曇りなき」と言ってみても、気の利いた言い回しに見えない。気取った口ぶり、くらいに感じる。良く分からないが、前節は和歌風で後節は漢詩風といった趣は有るのかも知れない。だというのに添え句の謙虚さがなんとも白々しい。源氏と宰相が冗談を言い合っている光景が眼に浮かぶ。と思って読み進めば、案の定「しめやかにもあらで」と結ばれている。

かつは頼まれながら(曇りなき身とはいえ、私は勧告を受けて)、かくなりぬる人(こうして謹慎している身です。)、昔のかしこき人だに(昔の賢人でさえ)、はかばかしう(事態が好転して)世にまたまじらふこと難くはべりければ(中央に返り咲くことは難しかったのですから)、何か(どうして私などが)、都のさかひをまた見むとなむ思ひはべらぬ(宮城内に再び足を踏み入れようなどと思うものでしょうか)」などのたまふ(などと御話しなさいます)。宰相(さいしゃう)、

「たづかなき雲居にひとり音をぞ鳴く、翼並べし友を恋ひつつ　(和歌 12-46)

「ひとりでも鳴き続けます、晴れる日を知っていますから　(意訳 12-46)

*是も冗句だろうが、源氏よりは宰相のほうが幾らか真面目に和歌の体裁を繕っている気がする。歌面は此方も分かりやすい。複意で「たづかなき」は＜解決方法が無い＝始末が悪い＞という言い回しらしいが、此処では＜田鶴が無き＝自分の他に田鶴が居ない＞に掛かっている。また「翼並べし」は贈歌を受けているから＜共に飛んで「春日の曇りなき」を「空に見」た＞という事に成る。詰まり「形勢の悪い御所で独り無罪を主張しましょう、一緒に過ごして無実を確信した者として」という心強さである。実際には、そんな風に無罪を言い張れるほど悠長な情勢では無いだろうが、それこそ友への慰めなのだろう。出来ないが気持ちを歌にする。源氏の主張姿勢とはだいぶ違う。

かたじけなく馴れきこえはべりて(失礼ながら親しくさせて頂いて居りまして)、いとしもと(なぜ御不在かと)悔しう思ひたまへらるる折多く(残念に思えてならない行事が多い此の頃です)」など(などとお応えになります。)、

しめやかにもあらで(気晴らしした分)帰りたまひぬる名残(宰相が御帰りに成ってしまった後の寂しさで)、いとど悲しう眺め暮らしたまふ(源氏は余計悲しく空しい日々をお過ごしになりました)。

[第二段　上巳の祓と嵐]

弥生の(やよひの、三月の)朔日に出で来たる(ついたちにいできたる、最初の)*巳の日(みのひ、十二支の六番目の易に当たる日に)、　*この陰暦３月の最初の巳(み)の日を上巳(じゃうし)と言って、中国の占いで特に御祓いの御祀りの日取りとされた、との事。後に日付が３月３日と定められて、雛祭の日となった、らしい。元々の行事は上巳の祓(じゃうしのはらえ)といって、宮中ではこの日に曲水の宴が行われ、民間では紙の「ひとがた」を川に流して災いを払った、らしい。ただ、気象上というか気候風土の観点で特徴付けられるのは、蛇が冬眠から醒める時期という事で、源氏の再生を暗示する設定と言う指摘は多い。

「今日なむ(今日こそ)、かく思すことある人は(悩み事がある人は)、御禊(みそぎ、厄祓いを)したまふべき(為さるべきです)」と、なまさかしき人の聞こゆれば(謂れを聞きかじったであろう従者が行事に*造詣の深い源氏に申して来たりしたので)、海づらもゆかしうて出でたまふ(海辺の見物がてら御出掛けに成りました)。　*「造詣」というより源氏は、前述した＜再生の意図＞を「腹蔵」していた、と言うべきかも知れない。

いとおろそかに(ごく簡素に)、軟障(ぜんじゃう、飾り幕)ばかりを引きめぐらして(だけで囲った祭祀場を設置して)、この国に通ひける(この国に遣わされていた)陰陽師(おんやうじ、占役人を)召して(呼び寄せて)、祓へせさせたまふ(御祓いをさせなさいました)。舟に事事しき(ことことしき、大きくて目立つ)人形(ひとかた、身代わり人形を)乗せて流すを見たまふに、よそへられて(源氏は自分が島流しに在ったように御思いに成って)、

「知らざりし大海の原に流れ来て、ひとかたにやはものは悲しき」(和歌 12-47)

「大海原に流されて、ひとかたならず泣き濡れる」（意訳 12-47）

とて、ゐたまへる御さま（浜辺に座って海を御覧に成る御姿は）、さる晴れに出でて（その広々とした景色にも引き立って）、言ふよしなく見えたまふ（言い尽くせない素晴らしさでした）。海の面（おもて）うらうらと（穏やかに）凪ぎ渡りて（なぎわたりて、鎮まり返って）、行方も知らぬに（果てない景色に）、来し方行く先思し続けられて（此れまでの経緯や此れからの見通しを次々と頭に浮かばせなさって）、

「八百よろづ神もあはれと思ふらむ、犯せる罪のそれとなければ」（和歌 12-48）

「大海原も穏やかに、鏡と照らす晴れた空」（意訳 12-48）

とのたまふに（と源氏が御詠いになると）、にはかに風吹き出でて、空もかき暮れぬ。御祓へもし果てず（式もし終える事が出来ずに）、立ち騒ぎたり（一同席から立ち上がりました）。*肱笠雨（ひじかさあめ、急な雨）とか降りきて、いとあわたたしければ（ひどく慌てて）、みな帰りたまはむとするに（皆お帰りなさろうとしても）、笠も取りあへず（笠も間に合わない）。　*「肱笠雨」は肱を笠にするような急に降り出した雨、にわか雨。注に＜「肱笠雨」は催馬楽の「妹が門　兄が門　行き過ぎかねてや　我が行かべ　肱笠の雨もや　降らなむ　死出田長　雨宿り　宿りてまからむ　死出田長」とある語句。＞とある。「妹が門（いもがかど）」は＜愛する女の家＞の意で、「入る（いる）」「出づ（いづ）」に掛かる枕詞との事。また、若紫巻の源氏が初めて若紫と添い寝した朝帰りに立ち寄り掛けた昔の馴染みの女の家の前で、「朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも行き過ぎがたき妹が門かな」（和歌 5-22）と従者に歌わせた場面があった。あの時は、若紫が子供なので添い寝とはいえ手出しが出来なかった源氏の物足りなさを表す記述なのだろうと思って、当該催馬楽は雑感して済ませたが、妙に引っ掛かる描写ではあった。そこでもしかすると、この催馬楽は意外と重要なのかもしれなので、改めて見ておく。「兄が門（せながかど）」は＜愛する男の家＞で宴席歌謡なので、「妹が門　兄が門」で其の席の男にも女にも語り掛けた文句なのだろう。「死出田長（しでたをさ）」はホトトギスの異名とあり、鳴き声の聞こえ方とも言われているそうだが、この漢字が広く認められている背景は次のようにある。「死出田長」は「賤田長（しづたをさ、農務の現場監督）」の文字りとされるが、これは＜田植え日時を厳しく触れて廻る煩さ方＞を初夏の田植え時期に避暑で飛来するホトトギスに準えた軽口ないし悪口かもしれない。ホトトギスは夜でも鳴く所為か、＜冥土＝死出＞から遣って来た鳥とも考えられたそうで、「死出の田長」と現場監督を態と縁起でもなく言ってみるのは、陰口には有り勝ちな持ち味だ。まぁ歌謡なのだから＜シデタヲサ＞に囃子言葉としての音感もあるだろうが、「肱笠の雨」で「雨宿りてまからむ」のは「死出田長」が飛来する初夏の風情、ではありそうだ。歌の大意は、「好きな人の家を通り過ぎようとしたら俄か雨が降ってきたので雨宿りして行こう、ホトトギスの鳴く時期だが今日は生憎と田植えは出来ないな」、という事かと思う。しかし、上巳は晩春で初夏ではない。本当に不意の天変、と言った所か。

さる心もなきに（思いの外の荒れ模様で）、よろづ吹き散らし（何もかも吹き飛ばす）、またなき風なり（大変な暴風雨でした）。波いといかめしう立ちて（高波が寄せて）、人びとの足をそらなり（皆浮き足立ちました）。海の面は、衾（ふすま、布団）を張りたらむやうに（を広げたように）光り満ちて（光ってうねり）、雷鳴りひらめく（雷が鳴って閃く）。落ちかかる心地して（落ちて来そうで脅えながら）、からうしてたどり来て（人々は辛うじて家にたどり着いて）、

「かかる目は見ずもあるかな(このような目には今まで遭った事が無いな)」
「風などは吹くも(風などは吹くことがあっても)、けしきづきてこそあれ(前触れがあっての事だ)。あさましうめづらかなり(驚くほど珍しいことだ)」

と惑ふに(と困惑しているが)、なほ止まず鳴りみちて、雨の脚当たる所、徹りぬべく(とほりぬべく、突き刺さるほど)、はらめき落つ(大きな音を立てて落ちてくる)。「かくて世は尽きぬるにや(是で世も終わりか)」と、心細く思ひ惑ふに(皆が不安になって狼狽していると)、君は、のどやかに経うち誦じておはす(源氏は落ち着いて読経していらっしゃいます)。

暮れぬれば(日が暮れると)、雷すこし鳴り止みて(雷は少し鳴り止んだものの)、風ぞ、夜も吹く(風の方は夜も吹いています)。
「多く立てつる願の力なるべし(嵐が収まってきたのは皆で願懸けをした賜物に違いない)」
「今しばし、かくあらば(もう少し嵐が続いたら)、波に引かれて入りぬべかりけり(家ごと波に引かれて海へ持って行かれただろう)」
「高潮といふものになむ(海には高潮と言うものが在って)、とりあへず(助かる者無く)人そこなはるるとは聞けど(人命が損なわれるとは聞いたが)、いと、かかることは(とても今日のような事は)、まだ知らず(聞いた例が無い)」
と言ひあへり(と供人たちは言い合っていました)。

暁方(あかつきがた、夜明け前には)、みなうち休みたり(みな寝入っていました)。君もいささか寝入りたまへれば(源氏もうとうと為さっていましたが)、そのさまとも見えぬ人来て(姿の見えない人の気配がして)、

「*など、宮より召しあるには参りたまはぬ(何故、神宮から御呼び出しがあったのに参上なさらないのですか)」　*注に＜異形の人の詞。『完訳』は「源氏は、海に呑まれかけただけに、この「宮」を離宮の意に解し、海神住吉の神殿に誘われたぐらいに直感したのであろう。なお、その源氏の理解とは別に、「宮」は宮中の意とも解しうる」と注す。＞とある。それに繰り返しだが、この「上巳の日」に源氏が「再生」を懸けた底意を持っていたと言う指摘は、やはり説得力があると思う。源氏にとって須磨は冬眠の地であった。そしてこの日に、目覚めるのである。しかしこの「再生」は幾らか複雑で、単に「中央への復帰」を意味しない。というか、簡単に中央復帰できる事情でもなく、実際に実現できるような情勢でもない。実子の「不貞の子」である弟宮を次帝に擁立する事は、背徳性・秘匿性からして重い宿縁を背負っているし、故院の遺言で春宮にはなっていても実力ある後見が居ない以上、兄である今上帝の采配を頼る他無い危うい事情に、実権は大后勢にあるという見通しの立たない現状である。そうした困難に打ち克って行く行動を「始動」する為に＜宮より召し＝住吉神の承認＝王家のお墨付き＞を源氏が求めた、というのは改めて書き出すと面倒な様でも、此処まで読み進んできた物語全体の印象には近い気がする。

とて(と言って其の霊体が)、たどりありくと見るに(自分を捜し歩いている夢を見ては)、おどろきて(思わず目を覚ますと)、「さは(さては)、*海の中の龍王の、いといたう(とても強い)ものめでするものにて(好奇心を起こして)、見入れたるなりけり(自分に目を付けたに違い無い)」と思すに(と御思いに成って)、いとものむつかしう(ひどく気味悪く)、この住まひ堪へがたく思しなりぬ(この須磨の住まいを堪え難く御思いに成りました)。　*「海竜王」は＜海中に住む竜神。海・雨の支配者。竜王。竜神。海竜神。＞(大辞林)とある。ところで、若紫巻に記された北山での雑談中にも、海竜王

は話題にされていた。其れは明石入道が娘の王家筋との結婚を願い「宿世違はば(宿命を果たせない時は)、海に入りね(入水して没せよ)と、常に遺言しおきて侍る成る」と話した良清の話題に、別の供人が口々に「海龍王の后になるべき傅き(いつき、大事に育てられた)娘ななり」「心高さ苦しや(勿体無い事で)」などと揶揄した場面であった。気楽な雑談場面ながら、海竜王は生贄を奉るべき存在として認識されていた事が窺がわれる会話でもあった。だから源氏は「死」を感じて脅えた、のだろうか。此処の文章は実に意味が把握しにくく、如何にも読者の気を引く手法とも感じられる。

（２００９年７月 30 日、読了）